

において能率を上げた。ハラシヨウ労働者として休日
が少し多くあった。作業場やその往復は、監視兵が付き
きりだった。

一日三回、エンバクのお粥とパン三〇〇グラムで
あった。補食に山菜や茸を入れ、量を増し補った。

タイセット収容所からハバロフスクへ、いよいよダ
モイだ。二カ月ほど建設作業、それよりナホトカに着
く。船名は栄豊丸という貨物船で、船内は平穩であつ
た。

昭和二十三年十月十八日、舞鶴に復員する。

帰国後、戦後社会の出遅れがあつて、営林署で森林
作業と行商をやり、昭和三十年に現在の寿司屋の本業
になる。

抑留記

長野県 立沢 三之介

伊那市小沢区に大正四（一九一五）年十一月二十八

日生。伊那町立実業補習学校を昭和七（一九三二）年
三月卒業。自家にて農業を手伝い、母、兄、兄嫁、
姉、私。

昭和十五年より東京に勤めに出る。

昭和十八年九月二十日、臨時召集により千葉戦車二
連隊に応召になる。小銃兵隊、軽機隊、重機隊、大隊
砲隊等である。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が穆稜に侵攻、戦闘参
加。八月十日、穆稜後退途中二回、戦闘する、犠牲者
二十人くらい出る。

九月二十三日、鹿道にて武装解除。鹿道で詔勅を知
る。連隊旗を焼却し連隊長服毒自殺、鹿道駅まで担架
で来るがその後不明。

十一月十一日、牡丹江にて解散。各自が食料として
トウモロコシを取り命をつなぐ。腹がすいて苦しかつ
た。途中駅々で給水できたが、脱走者があり（七人く
らい）、二日間給水ができず死ぬ思いであった。駅で
蒙古人が鶏の丸焼きを売りに来た。

十一月十三日、愛河出発。十二月四日、タイセット

到着。

仕事は伐採、枝焼き等をする。入浴は週一回シャワーを浴びる。そのとき衣服を滅菌する。衣服は軍隊当時の防寒服を着せられて、大体それで作業に出た。

途中、入院して、退院後炊事勤務を二カ月する。その後は元の仕事の伐採に帰る。末口四五センチメートル、長さ五メートル五〇センチが一クーボ、それを二人で四クーボの割当作業です。割当一〇〇%できない場合は、普通三五〇グラムのパンを三〇〇グラムに減らされる。苦しい事ばかり、楽しい事は一つもなかった。

軽い営内作業もする。身体が三級になると二〇%の恩典があり一〇〇%に認めてもらえる。四級は営内作業、健康管理の事は思わなく、病気になるって入院したいと思った。

一日三回、骨のスープ。肉等は食わず、十日に一回くらい、ニシンの五センチくらいのを食べた程度。冬は草もないので松の木の皮を食べるか、ソ連人の捨てたジャガイモの皮を拾って食べた。また、ゴミ

捨て場から骨や野菜のくずを拾って来て、焼いたり煮たりして食べた。

週に一回、夏はゴロゴロしており、冬は午前一回、午後一回、薪取り日が寒くて大変だった。

うす暗く、二段ベッドなので、下がちょうどよければ上は熱い。夜寝る前に洗脳教育を受けた。眠くて困った。聞いていないと、「反動分子」で、帰りを遅らせるとおどかさされた。

零下五〇度もある日、夜間作業をさせられた。生きていればいつか帰れると思ひ、信念を持って過ごしていた。

シベリア抑留を思う

長野県 桜井 義久

大正十四（一九二五）年八月三日、長野県上伊那郡富原村桜井に生まれる。

昭和十五（一九四〇）年三月、富原村立富原小学校